対面リーディング通信

2016年12月

2016年12月1日 発行　　第１73号（隔月刊）

「 対面リーディングの集い 」の報告

日時：１１月17日（木曜日）　１３時～１６時

今年度の「対面リーディングの集い」は、当館の岡本昇職員より「視覚障害者理解」を中心に、視覚に障害を持つ方の読書環境の紹介を始めとして、手引きの実演、盲導犬についてなど、いろいろな角度からの情報をお伝えしました。

今回は１７名の方がご参加下さいました。お忙しい中ありがとうございました。

第1部　「視覚障害者理解を中心に」
講師：岡本 昇 （情報文化センター職員）

・視覚障害者の情報環境

目が見えない、見えにくいという視覚障害の特徴として、情報の取得が困難になることが挙げられる。

＊視覚的な情報とは…
- 文字を読むこと
- 周りがどのような状況なのか

＊身体障害者手帳を取得している視覚障害者は日本に約31万人と言われ、その中で全盲の方の割合は２割から３割弱と言われている。一言で「視覚障害」と言っても見え方も出来ることも人によってさまざまである。

※　厚労省の最新調査（平成23年）によると、身体障害者１級から６級の手帳を持つ視覚障害者約315,000人のうち、１級は約108,000人（約34％）、２級は約85,000人（約27％）です。「全く見えないかほとんど見えない」に分類される1･2級の方の合計は約19万人、約60％になります。

ただし、手帳を取得していない視覚障害者全体（日本眼科医会の推計では164万人）で見ると、「弱視（ロービジョン）」の方が約90％に達します。

（2ページに続く）

今月号の主な内容

「対面リーディングの集い」の報告		福田　直樹・山岡　幸雄	1
対面リーディングの難所物語	使用文字の使い分けをちゃんと説明してくださいね	二村　晃	6
誌上勉強会	正確に読むとは　ーローマ字ー	木村　謹治	7
私のふるさと	福岡市博多区	白坂　マナミ	１１
寄り道・回り道	玄米＆やさい食堂　玄三庵	中川　亜希子	１２
お知らせ　ほか			１３

＊視覚障害の方といえば点字を使うイメージがあるが、現在では点字を読める人は全体の２割から３割弱くらいと言われている。

※　正確な調査は行われていませんが、厚労省のわずか364人を対象にしたサンプリング調査（平成18年）では、「点字ができる」と答えた方は約13％。ただし、１級の方では約25％、２級の方では約13％、３から６級の方では１％弱で、視力を使うことのできない方ほど、点字の利用度が高いと言えます。

点字使用者の減少の理由としては先天性の病気などにより視覚障害になっている方（先天盲）よりも様々な理由により中途で視覚障害になった方が増えてきたことや、高齢化が進んできているという背景がある。

※　身体障害者手帳を所持している視覚障害者約31万人の内、65歳以上は約69％、60歳以上は約80％を占めます。またこうした方々の相当数が中高年以降の中途視覚障害者と思われます。

・点字図書、録音図書について

＊点字の図書は非常にかさばる。例として独和辞典は全部で55冊、地名・地理辞典は全20冊にもなる。
　かつては点字の図書目録から読みたい図書を探すしかなかったが、現在はインターネットによる全国の図書館のネットワークであるサピエ図書館を利用し、パソコンを使って検索や貸出の申し込みができるようになった。

＊録音図書はオープンリールから始まってカセットテープとなり、現在はＣＤで貸し出されている。

＊点字図書、録音図書共にデータを専用の機器に入れ、大量の図書を手軽に持ち歩いて楽しむことも出来るようになった。

＊このように点字や録音の図書は進歩してきたが、今すぐ読みたい、聞きたいということには対応し切れていない。そういう時の助けになる存在として対面リーディングが活用されている。

＊現在では個々の年齢や視力の差、出来ることの差はあるが、各種の情報機器や対面サービスなどを活用して豊かな生活を送っている方も増えてきている。その反面、そういった機器やサービスの存在自体を知らない方もいるのが現状であり、情報をいかに伝えるかが課題となっている。

・見え方、見えにくさへの理解について（一例）

- 視野狭窄　見える範囲が狭まっている状態。重度の場合ラップの芯を目に当てているようなイメージ。前を見ると足元が見えず、足下を見ると前が見えない。訓練しないと一人で歩くのは困難。
- 中心暗点　視野の中心部が見えない。人間の目は中心ほど見えるようにできているので、周辺視野は中心より視力が落ちるのが通常。周辺部が見えるので歩行は出来ることが多いが信号など見ようと思ったところが見えない。
- 上記が組み合わさってドーナツ状の視野になっている方もいる。

あくまで見え方の一例であり、人それぞれに多様な見え方をしていると理解して欲しい。

・手引きのおさらい　実演を踏まえて

・基本的な注意事項

①絶対に後ろから押さない

②手引きをする人は半歩前に立ち、自分の肘を持ってもらう。肘は張らずに自然にしておく。左右どちらがよいかは相手に尋ねるとよい。身長差があったり、半袖で直接肌にふれるのに遠慮することもある（夏場や、異性間など）ので、肘よりも肩を持つ方がよい場合もある。
手引きに慣れた方なら肘の向きで方向が分かる。力を抜いて腕をおろしておくと、エレベーターや階段の上り下りの感覚が伝わりやすい。段差をまたぐ時は、“一段段差があるので、上がって、降ります”など事前に伝えると体を動かしやすい。

③歩くスピードは、まずゆっくり歩いてみて、もう少し速くしますか？など話しながら歩調を合わせるとよい。いろいろな方がいらっしゃるので様子を見てコミュニケーションをとりながら調整する。

④椅子へのアプローチは、声掛けと一緒に、背もたれを案内すると方向がわかりやすい。座面の位置からだと、背もたれの位置関係がつかみにくく、そのまま転倒してしまった事例もある。また、背もたれがない場合はそのことを伝えるようにするとよい。

⑤盲導犬のほとんどは、ユーザーの左側で誘導する訓練を受けている。北海道盲導犬協会と中部盲導犬協会では、左右両側で誘導できるよう訓練している。手引きをする時は、ハーネスを持っていない側で手引きすることが基本となるが、人によって違いがあるので、どちら側の手引きがよいか尋ねるとよい。

⑥盲導犬は、ハーネスをつけている間は仕事中。食べ物をあげたり声をかけたりするのはもちろん、目を合わせるなど盲導犬の注意を引くことはしてはいけない。

＊盲導犬をかわいそうという方もいるが、基本的にほめることで訓練していく。いやなことはしたがらないし、無理強いすることなく日々接していくことで信頼を築いている。盲導犬はとても賢いので、楽しんで仕事ができるようにしている。「盲導犬は厳しい訓練を受けて我慢してやっている」と言われることがあるが、そうではないことを知ってほしい。

・声掛けについて

「大丈夫ですか？」は実は答えにくい。「何かお手伝いしましょうか？」という声掛けが答えやすく感じる。また、腕などに軽くトントンとすると自分に声が掛かっていると分かりやすい。ただ、利用者も、声を掛ける方も、体にいきなり触れることに抵抗を感じる人もいる。「断られて当たり前」くらいに思って気軽に声を掛けてもらえると嬉しい。声掛けしたものの「必要ない」と応える人がいるのは、迷惑な勧誘をしてくる心無い人からの声掛けなどで嫌な思いをした、ということも背景にある。めったにないことだが、一度経験するとやはり男性でも、しばらく神経がピリッとすることがあるので、女性ならばなおのこと、態度が固くなることも少なくない。

盲導犬といることでほとんどのことができる。ただ、外に出られるがゆえに事故に遭うこともある。慣れた場所でもいつもより人が多かったり、人の流れが変わっていると迷ってしまうこともある。困っているときには、声掛けが本当にありがたく感じる。実際、ホームからの転落経験がある盲導犬ユーザーは５人に１人いるという結果もでているほどで、危険だなと感じたときは細かいことは気にせず、ためらわずに声掛けをするとよい。

第２部　意見交換会

自己紹介から、それぞれ対面で気になっていたこと、そこからの対話として。

①対面リーディングは点訳や音訳のようなチームではなく個人で行うため、このやり方でよかったのかという自問自答が多い。集いに参加して他の方の意見を聞くことができてよかったとの声が多くあった。

・録音を依頼される場面で、詰まったり、間違えたりして、よく録音を止めてもらって心苦しかったが、間違ったら間違ったなりに“あ、間違ったわ。ごめんなさい”と言いながら途切れることなく続ける方法もあるとわかり、気持ちが楽になった。

・初見であるということは、事前の準備にたくさんの時間を費やす音訳と比べ、臨機応変さが求められる。その分、今、利用者さんが欲しい情報を提供できるというメリットがわかったので、それを活かす方法をこれから考えていけそう。
・対面は声を媒介にした「音のサービス」と考えている。読みのテクニックを考えすぎると読めなくなり、兼ね合いが難しい。

②わからない地名の読みや漢字、専門用語などをどうしているか。

・後で調べる。わからない時は利用者の方がよく知っていることも多い（専門書など特に）。わからない時はそれはそれでよいと言ってくださる方も多く、コミュニケーションを取りながら進めるのがよいのではないか。

・電子辞書を使う。対面担当が調べる。記録用紙、引継ぎ表というものもある。最初だけしか読み仮名がなく、度々出てくる名前などを書き出しておき、次の人と共有することでよりよい対面に繋げられることもある。試験対策など、正確な情報がほしい場合は対面の調整の時点で担当からも選ばせていただき、また資料のコピーなどを事前に用意することで対応いただいているのが現状。重ねてになるが、対面であるメリットを活かした読み上げの対応が大切なのではないか。

・対面リーディング以外に、録音ボランティアなど、専門的に本を読むということを勉強することで自信がついた面もある。また、厳しい意見・要望（こういう風に読んで欲しかった、こういう所が聞きづらかったなど）も、時には利用者さんから聞いて、自身の成長に繋げたいという気持ちがある。

・回数を重ねることで自分の得意な分野もわかってくるといったお話もあった。

③お話好きの方に対して

・２時間の内、半分がおしゃべりということもある。そういう中で本を読むことだけが対面リーディングのボランティアでないかもしれないとも考えるようになった。一人で外出する機会が制限される中、情報文化センターに足を運ぶ方たちへのサポートとして、お話をするのも一つのボランティアではないか。

＊反対に、あくまで対面は情報提供のサービスであるから、お話したい方に対しては改めて別のサービスで対応するなど考えてもいいのではないか、という意見もあった。
・知識を得るために情報を求めて来られる方もいれば、既に録音図書ができていても、書いている内容の中で知りたいことを、より掘り下げながら情報を得られる対面の良さを求めて来館される方など、利用者もさまざま。

・利用者それぞれに気持ちの違いもあるので、いろいろな人との交流を楽しみながら対面をしているとの意見もあり、ボランティアとして、いろいろな考えをもって対面に臨まれているのが伺える質問となった。

④休憩の取り方について

２時間続けて一生懸命読む、という対面を経験された方もあり、休憩の取り方についての意見が交わされた。

・読む方も喉がかすれてくるし、聞く方も大変なので半分の一時間くらいのところで断りをいれて休憩をとるようにしている。→余談ながら、昔はお茶を用意して入れることが当たり前で、自然と間をとることができていたが、今はペットボトルが主流でなかなか間をとるのが難しいかもしれない、というお話もあった。

・人によっては休憩を言い出すのが難しい場合もある。それでも、お互いに無理のない範囲を探っていくことが求められるのではないか。しんどいなと感じる前に、思い切って休む、ということを気兼ねなく言えるようにしていくことが、結果として対面ボランティアを続けていけるのではないか。

⑤　対面中の録音に関連して

・利用者が途中で眠ったりすることもしばしばある。録音をしている場合は、「自分の声が心地よかったんだな」「帰ってから振り返ってもらえばいいか」と思って読んでいる。

・他館のサービスでは対面はあくまでその場で完結するものとして、録音を認めていない館もある。→日ラとしては、試験の問題や、気に入った本を繰り返し聞きたい、といった要望を聞いているので録音を認めており、録音機を用意するなどの対応をしている。

⑥対面ボランティアと利用者の割合について
実際に利用される利用者に対してボランティアが多すぎるということはないのか？

（担当より）毎日のように利用される方もいれば、年に一度だけ来られる方もあり、利用状況や要望は様々です。そのため、繰り返し同じ方への対面依頼をさせて頂いたり、急な依頼になることも少なくありません。日程が合う方・内容に即した方をコーディネートするにはほとんど余裕がないというのが現状です。調整にあたっては、一か月に一度を念頭にしていますが、間が空いてしまうこともあります。それは日程の調整が上手くいかないためで、決して手が余っているのではないことを是非ご理解下さい。

今回頂きましたご意見を今後の活動に役立てて頂ければと思います。

過去の集いでも様々なご意見を頂きました。情報文化センターのホームページから過去の対面通信をご覧頂けます。集いの報告は各年12月号に掲載されています。

[対面通信バックナンバーのURL]
http://www.iccb.jp/download/taimentsushin/ （13ページに続く）

82.使用文字の使い分けをちゃんと説明してくださいね

二村（ふたむら）　晃（あきら）

今年は寒さの到来が暦どおりで、いささか早いですね。北海道には立冬と同時に吹雪の厳冬の寒波が襲い、荒れ狂っています。私が住む能勢の里も、11月初旬の立冬から12月の寒さがやって来て、震え上がって過ごす毎日。慰めは、新聞の音訳テープです。

私はこのところ読売新聞のコラム、編集手帳を川西市のリーディンググループに読んで頂いています。毎月１日から15日までの15日間と、16日から月末までの15日間をそれぞれ60分テープに入れて、送って頂いています。

どれも実に流暢（りゅうちょう）に読んで頂いていますが、今回の読みにはちょっと疑問を感じました。それは、原本で使われている文字の説明がなかったことなのです。その名詞がひらがなで書かれているか？　カタカナで書かれているか？　漢字で書かれているか？　読んで頂く音訳者の口調によって類推はできるのですが、正確に読み取ろうとした場合、やはり使用してある文字の説明を入れておいてほしいですね。テープを再録してみましょう。

「読売新聞編集手帳」平成28年10月16日のものです。

〈山本周五郎の小説、『樅（もみ）ノ木は残った』の登場人物に、柿崎六郎兵衛（ろくろべえ）という剣術使いがいる。冷酷な男で、仲間の浪人の腕を木剣で叩き折る。復讐に使われたのが「やわら」、即ち柔術だった。投げる。締めて落とす…。描かれた必殺技は、この武術の半面でしかない。敵を倒す「殺法」と、受けた傷を癒やす「活法」とが表裏をなしたのが、古来の柔術だという。活法の技は骨接ぎなどの名で後の世に伝わり、治療法としての確立をみた。そんな歴史が、日本柔道整復師会のホームページに出ている。ちなみに蘇生させるといった意味で「カツを入れる」という時のカツは、活法と同じ「活」である。〉以上コラムの文章は少し難解ですが、見事なものです。

原本はまず、「やわら」とひらがなの総称で括り、漢字の「柔術」を記して、補足しています。この文字の使いわけを説明してほしかったのです。次いで蘇生の術にまで言及し、カタカナの「カツ」と、漢字の「活法」を並べて、治療の基本を説いています。音訳者はスラスラと読まれましたが、使用文字の使い分けを一言説明して下さいね。

この後、原文は柔道整復師による治療費不正請求の問題に触れ、患者の負傷箇所を次々でっちあげる「部位転がし」の説明もありますが省略します。面白いコラムでした。

新聞を耳で読む私に嬉しい時間は、コラムと社説が一緒に入っているグループ《とも》のテープを聞く時です。10月29日の第２社説では、『大阪万博誘致、意義や経済効果が見えにくい』と題して、国際万博を目指す大阪府の基本構想案に問題点を投げかけました。「人類の進歩と調和をテーマに掲げた1970年の大阪万博には、日本中が沸き、6422万人が来場した。だが、高度成長期とは経済環境や社会状況が大きく異なる。国民が万博に何を望むのか？丁寧に汲み取ることが大切だ」と述べています。東京オリンピック、更にはその５年後に大阪万博、簡単にこの世におさらばするわけにはいかなくなりました。

木村（きむら） 謹治（きんじ）

対面リーディングの実際 １９

― 正確に読むとは　ローマ字 ―

「KOBAN」ってなに？

「KOBAN」？　当然「小判」だと思いますよね。残念ながら間違いです。そう、「交番」です。

何故ローマ字で書くと「KOBAN」なんでしょうか？　そもそもローマ字で書く必要があるのでしょうか？

外国の方にわかりやすくするためなら「police box」と書いてある方が解りやすいと思うのですが…。「こうばん」は今や世界語になっているのかも知れませんね。

ローマ字表記には、「KOUBAN」などいろいろな表記の仕方があり、どれも間違いではありません。

では、なぜ「KOBAN」なのでしょうか？

交番制度は、日本独自の「KOBANシステム」として米国大学教授に紹介されたほか、他の英語文献にも「KOBAN」の表記が見られるようになり、国際語としての市民権を得るようになったため、警察庁が「KOBAN」と全国統一したからです。

実は、交番という機能は日本独自のものなのです。1874（明治７）に東京警視庁に「交番所」がはじめて設けられましたが、当時は、警察官が警察署から特定の場所に出向いて、交替で立番をする形をとっていました。

「交番所」の名称の由来は、「交替で番をする所」ということから「交番所」となったものと思われます。

この交番所はその後、建物を建てて、そこで仕事をする現在の形に変わりました。

その後、1888（明治21）年に「派出所」、「駐在所」という呼び名で全国統一されたものの、「交番」という呼び名が市民に親しまれていたため、1994年に再び「交番」という名称に統一された。近年、来日する外国人の増加に伴い、分かりやすくするために「KOBAN」と表示されました。

サイパン島のパセオ・デ・マリアナス交番

1954（昭和29）年12月９日付内閣告示「ローマ字のつづり方」の「そえがき ４ 長音は母音字の上に ^ をつけて表す。なお大文字の場合は、母音字を並べてもよい」に従えば、「KOBAN(Oの上に ^)」か「KOOBAN」でなければならない筈です。

地名では、「TOKYO」「KYOTO」「OSAKA」「KOBE」と違反だらけです。

では読む時はどうしますか。写真や前後の文章で「交番」と分かれば「こうばん」と読みます。しかし、いきなり出てきた場合は「ケイ・オー・ビー・エイ・エヌ」とスペルを読むか、「ローマ字で『こばん』と書いてあります」と説明するしかないでしょうか。対面リーディングでは、とっさに判断しなければなりません。

では、漢字で書かれているのではなく、ローマ字で書かれているという読み手の注は必要でしょうか。ローマ字表示に意味のあるも

のでは説明が必要でしょうが、漢字・平仮名・片仮名の違いを説明しないと同じように、さらっと流せばいいのではないかと思います。

この案内板を見て何か気がつきましたか？

そうです、設置者によって「ｎ」になったり「m」なったりしています。

現在、街で見かけるローマ字の大半は「ヘボン式」を採用しています。「し」は「shi」、「ち」は「chi」と表します。

しかしヘボン式の中にもいくつかのタイプがあり、特に違いが出るのが「ん」の表記方法です。「ん」は通常「ｎ」で表しますが、一部のヘボン式では「ん」の後にｍ・ｂ・ｐが続く場合、「ｎ」が「m」に変化するのだそうです。

文章にすると複雑に思えますが、至って単純なルールです。例えば「しんぶん」は「shimbun」、「さんま」は「samma」、「あんぱん」は「ampan」となります。

言葉の発音に詳しい大東文化大学文学部の山口謡司准教授は「CommandやCompanyのように、後ろがｍ・ｂ・ｐの場合はｎではなくｍで表記するのが英語圏のルール」と解説しています。「欧米の人々は、ｍ・ｂ・ｐの前にｎがくるとうまく読めない」そうです。

さらには発音上の特徴も指摘しています。

「『にほんばし』『かんだ』と声に出してみると、同じ『ん』でも発音の仕方が違うことに気がつきます。『にほんばし』の『ん』は唇を閉じた状態で発音していますが、『かんだ』は唇を離したまま。これを区別するために、ｍとｎを使い分けているのです」

つまり欧米の人々にとっては、「Nihombashi」の方が読みやすいらしい。だったら街の表記もmが増えているのか……と思いきや、そうでもないようです。

各所で異なる「ん」のローマ字表記ルール

bmpの前はmで表記（Nihombashiなど）	bmpの前もnで表記（Nihonbashiなど）
パスポートの氏名や住所	交差点名
JR東日本の駅名	街区表示版
東京メトロの駅名	国土地理院の地図
都営地下鉄の駅名	みずほ銀行の支店名
小田急、東急など私鉄各線	三菱東京UFJ銀行の支店名
日本橋三越本店	三井住友銀行の支店名
日本橋タカシマヤ	コレド日本橋
日本橋フロント	日本橋三井タワー
東京日本橋タワー	東京建物日本橋ビル
栃木県のガイドライン	群馬県の表記

交差点名や街区表示板は概して「ｎ」で、駅名は「m」の場合が多いです。

同じように大阪の難波も同じです。「ｎ」「m」混在です。街を歩く時に表示にも目を向けて見れば面白いです。

話はそれますが、問題なのは公文書です。群馬県では「ｎ」を使っていますが、パスポートが「m」を採用しており、海外進出を狙う県内の企業や、留学を検討する学生たちが海外の行政機関や学校から表記の混在について違いを指摘されたりするそうです。

群馬県は「異なる２つの表記のどちらも有効」と書いた証明書を発行するようにしました。また何度も対応を求められた県は2010年、ホームページ上に英文の説明文書を掲載したそうです。

「ｎ」「m」の表示の違いも、よほどのことで無い限り説明は必要ないと思われます。

休憩中の雑談の中で、こちらは「ｎ」ですが、ここは「m」ですねと話せば、話題が広がるかも知れないですね。

複雑なのは公文書であるパスポート上のローマ字氏名ですね。「河野洋子」さんなら「KOONO YOOKO」でなければならない筈ですが？

旅券事務所のパスポートの案内の中に書かれた「注意すべきつづり」では

１）撥音“ん”はNと記入するが、B、M、Pの直前の“ん”はMに置き換える。

［例］
難波（なんば）　→　NAMBA
本間（ほんま）　→　HOMMA
寛平（かんぺい）　→　KAMPEI

2）促音子音を重ねて記入するが、後がCの場合は重ねず、前にTをおく。
［例］
服部（はっとり）　→　HATTORI
吉川（きっかわ）　→　KIKKAWA

ただし、ち（CHI)、ちゃ（CHA)、ちゅ（CHU)、ちょ（CHO）音に限り、その前にTを加える。
ほっち　→　HOTCHI
はっちょう　→　HATCHO

3）長音は原則として記入せず、「うう」は UU ではなく U、「おう」「おお」は O U OO ではなく O と記入。（ただし、姓又は名の末尾の「おお」は OO と記入。）
［例］
「おお」：おおの →　ONO
（例外：末尾の「おお」＝せのお → SENOO）
「おう」：　こうの →　KONO
　　ようこ →　YOKO
　　こうら（甲良）→ KORA
「うう」：　うりゅう →　URYU
　　ゆうこ →　YUKO
ただし、「おう」又は「おお」（末尾の「おお」を除く）の場合、 下記の氏名表記の例外のとおり、OHと表記することもできます。

4）氏名表記の例外　OH による長音表記
「おう」または「おお」（末尾の「おお」を除く）の長音は、申請書用紙には O と記入していただきますが、パスポートでは OH と表記することもできます。
［例］
大野（おおの）　ONO　→　OHNO
洋子（ようこ）　YOKO　→　YOHKO

日本語の教科書「JAPANESE FOR BUSY PEOPLE」や「新日本語の基礎文法解説書」では「Tokyo Byoin(oの上に横棒)」、活用形の「～でしょう」→[～desho（oの上に横棒）]です。一方、助詞の「は」→[wa]、「へ」→[e]、「を」→[o]となります。

これらはローマ字を「表記法」としてではなく「発音記号」として使用しているわけですが、「母音の上に横棒」や「母音の上に ^ 」は、今の普通のワープロソフトではできません。上記の「KÔBAN」の「Ô」は、欧文記号の中にあります。

パソコンで書こうとすると、「ローマ字→かな漢字」変換ソフトでの入力法は、
交番：KOUBAN(N)
東京：TOUKYOU
大阪：OOSAKA
河野洋子：KOUNO YOUKO
今日は月曜日：KYOUHAGETUYOUBI ですね。

日本語は、「漢字／かな／カナ」での表記以外に、ローマ字表記も正式な表記法のひとつの筈なのに、どうして、長い間このように不統一のまま放置されていたのでしょうか。

ローマ字表記というと、外国人のための表記法と思われる方が多いでしょうが、そうではありません。戦後かなりの期間、外国へ仕事で出張または滞在していた日本人にとって、本社と文書で連絡する手段としての国際電報やテレックスでは、ローマ字以外では表記できないため、毎日ローマ字で日本語を書いていたのです。国際電報では、１語何円／ドル等という課金方式で単価が高かったので、分かち書きが重要でした。

ファックスの出現で一応それが解決され、今やインターネットで自由に日本語通信ができると思われがちです。例えば海外のホテルに備え付けのパソコンで日本語を入力するのは不可能に近いです。問題は、日本語入力システムの有無です。ATOKやIMEが必要となります。

これを回避するのには、どうしても、しっかりした「ローマ字表記法」が確立されている必要があります。

Facebook や LINE などで、海外の人と日本語のやりとりする場合は、相手先に日本語入力システムがなければ、ローマ字になります。

国語審議会は、「ローマ字表記」は正式な国語表記であるとの認識をもって、分かち書き問題も含め、はやく統一表記方式を確立することが望まれます。

さて、これは何と読みますか？

「CA」はローマ字表記にはありません。が、「か」と読むのでしょうか？　となれば「どちか」になりますね。正解は

これ。分かりますか？　堂島地下街です。略して「ドーチカ」ですね。大阪人だから分かるものの、写真を見ても青森や熊本の人には分からないでしょうね。

反対に、私たちが岩手や鹿児島の写真を見ても細かなことは分かりませんね。

脱線ついでに、韓国の話です。韓国人から名刺を貰うと、あれ？と思う事があります。ハングル表記とローマ字表記で発音が符合しない事があるのです。例えば、韓国で２番目に多い名字「李」は「イ」と発音するのですが、ローマ字表記は何故か「Lee」となります。英語で「イ」さんの事を話す時は「ミスター・リー（Mr. Lee）」ですが、韓国語では「イ」さんになります。その他、「ノ（盧）」「イム（林）」「ユ（劉・柳）」「ナ（羅）」さんなども、ローマ字表記は「Ro」「Lim」「Ryu」「Ra」となります。この不思議な現象は、日本語の音読み（ロ・リン・リュウ・ラ）で第一音声がラ行音の漢字に起こっています。

朝鮮固有語には、もともと語頭にラ行音が来る単語は余りなかったらく、辞書を見ると、ラ行音で始まる言葉が極端に少ないです。しかもその殆どが外来語なのです。語頭にラ行音の漢字が来る場合は「r/l」が落ちたり、「n」に置き換えて発音されています。上の名字がそのいい例で、普通名詞では、例えば「ネンジャンゴ（冷蔵庫）」等があります。が、漢字が語中に収まると「r」音が戻ってきて、例えば「ヨルラク（連絡）」のようになります。「イ」さんに「Mr.」が付けば、名字は語中に来るわけで、やはり「r/l」音が戻って「ミスター・リー」になるのです。と、一応規則性はあるので理屈がわかれば大して混乱しないのですが、時と場合によって「イ」と言われたり「リー」と言われたりするので、何も知らない人には不可思議と思うのに違いありません。

ハングルローマ字の不思議はまだまだあります。興味のある方は、是非調べて下さい。

この項を書くに当たって下記のホームページを参考にさせていただきました。

『兵庫県旅券事務所』
『NIKKEI STYLE』
『なんだこりゃ！？』
『きょうのことばメモ』
『Q&A』北川和彦
『ふしぎ日本語』

日本語には漢字・平仮名・片仮名・ローマ字表記があったことを出しました。多くの方は、ローマ字を小学校の時に習われたと思います。ローマ字もれっきとした日本語です。これを機会に考えるのもいかがでしょうか？

福岡市博多区

メディア製作センター　白坂（しらさか）　マナミ

私が生まれ育ったのは福島県ですが、今年の３月まで３年間、福岡県福岡市の博多区に住んでいました。

３年間という短い間でしたが、東北からいきなり九州へ住んだということもあり、様々な文化の違いに戸惑いながらも、とても中身の濃い時間を過ごせたと同時に、福岡は私にとって、とても大切な「第２のふるさと」となりました。

皆さんは「福岡」「博多」というと「博多どんたく」や「博多祇園山笠」、「中洲の屋台」などがまず思い浮かぶでしょうか。
もしくは、「博多ラーメン」「明太子」、「もつ鍋」など、食べ物のほうが先に思い浮かぶ方もいらっしゃるかもしれません。私は後者です。

今回は、私が福岡に住んでびっくりしたことの中から、多分あまり知られていない福岡のソウルフード「博多うどん」をご紹介したいと思います。

「博多うどん」は福岡市を中心によく食べられているうどんのことで、特徴としては「麺のやわらかさ」が挙げられます。

私の中では、博多といえばラーメンというイメージが強かったのですが、職場の方たちや友人たちも「ラーメンよりうどんが好き！」という人が多く、驚いた記憶があります。

「麺がやわらかいって、どれくらいやわらかいんだろう？」と不思議に思った私は、友人に、地元でとても有名な「牧のうどん」というお店に連れて行ってもらいました。

このお店では軟めん、中めん、硬めんの中から麺の硬さを選べます。

友人に勧められるまま「ごぼ天うどん」の軟めんを頼んで数分後、運ばれてきたうどんの傍らにはお出汁の入った小さなやかんが。このお出汁を注ぎ足しながら頂くとのこと。お出汁なんてそんなに注ぎ足さなくても大丈夫なのになあ、としか考えず、まずは頂きました。お出汁は間違いなく美味しい。そして麺は・・・歯ごたえが全くありません。やわらかくて、ふわふわで、もちもち。お箸で持ち上げようとすると、麺が切れてしまうくらいのやわらかさです。

友人曰く、このお店の軟めんは最低でも40分茹でており、もちもち感を出すために冷水で締めたりもしていないのだそうです。なので、もたもたしていると麺がお出汁を吸いこんで、どんどん増えていきます。必要ないと思っていた先ほどのお出汁入りのやかんが大活躍です。

私は今まで、讃岐うどんのようなコシの強い麺を好んで食べていましたが、この、果てしなくやわらかい麺と格闘しているうちに、なんだかとても楽しくなってきて、食べ終わる頃には、地元の人たちの「うどんへの愛」が何となく分かったような気がしました。

福岡には、この他にもたくさんのうどん店があるので、お好みによって選んで頂けると思いますが、福岡へ行かれる機会があれば、この40分茹でた「軟めん」を経験してみてはいかがでしょうか。
地元民気分も味わえますし、びっくりの連続できっと楽しい時間を過ごせると思います。

寄り道・回り道

レポーター　中川（なかがわ）　亜希子（あきこ）

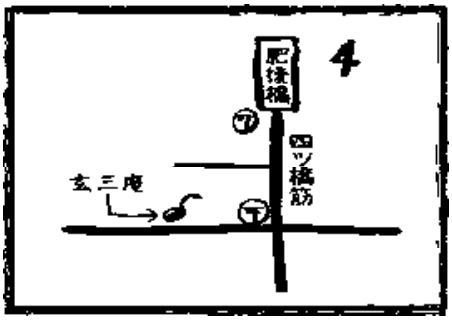
玄米＆やさい食堂 玄三庵（げんみあん）

【所在地】　大阪市西区江戸堀1－9－14　江戸堀双葉ビル1階　（肥後橋本店）
　　大阪市中央区今橋4－1－1　淀屋橋odonaビルB1階（淀屋橋odona店）
【行き方】　肥後橋本店：地下鉄四ツ橋線　肥後橋駅7番出口　徒歩5分
　　淀屋橋odona店：地下鉄御堂筋線　淀屋橋駅10番出口直結
【営業時間】　肥後橋本店：平日/11：30～15：00（ラストオーダー 14：45）
　　淀屋橋odona店：平日/11：30～22：00（ラストオーダー 21：30）
　　土日祝/11：30～21：00（ラストオーダー 20：30）
【定休日】　肥後橋本店：日曜日・祝日・土曜日
　　淀屋橋odona店：年中無休（odona様のお休みに準じます）

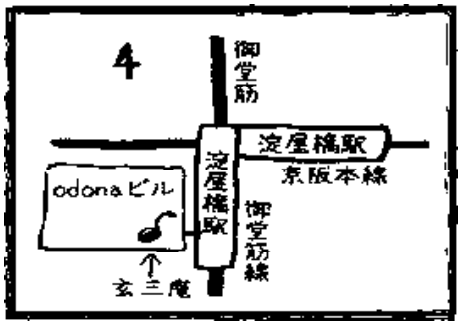
台風の影響で野菜の値段が高くなり、なかなかお鍋が作れない今日このごろ、皆様いかがお過ごしでしょうか。図書貸出係の中川です。あまりの野菜の高騰ぶりに、こうなれば、おいしい野菜の店を紹介しようと選びましたのがこちらのお店「玄三庵」。

玄米と野菜を中心にしたメニューを目当てに、健康志向の方が男女問わず訪れるお店です。

おすすめは、ミニ豆乳プリンがデザートでついてくるランチです。写真の日替わり定食「39品目の健康定食」920円（土日祝は980円）を筆頭に、「野菜たっぷりビビン丼」770円、「地鶏の甘辛玄米丼」890円、「野菜たっぷり玄米カレー」880円など、1000円以内のラインナップ。玄米ご飯と、野菜のお味噌汁もお代わりし放題。しかも、ランチタイムでは、喫茶メニューが肥後橋店では+50円、淀屋橋オドナ店では+150円追加で楽しめます。有機栽培コーヒー(Hot or Ice)、豆乳オーレ(Hot or Ice)、有機栽培三年番茶(Hot or Ice)の中から選べます。肥後橋本店とオドナ店。肥後橋店の方が追加の喫茶メニューが+50円で安いですが、平日昼間しか営業していません。オドナ店は年中無休で夜のディナーをやっていますが、肥後橋店より若干高いです（特に土日はランチもすべて+50円）。しかし、オドナ店ではお持ち帰り用に日替わりデリ弁当810円が用意されていて、お持ち帰りとはいえ「お味噌汁」「豆乳プリン」もついてきます。平日お昼は行列ができるオドナ店では、弁当をお持ち帰りして食べる方も多いです。ただし、ご飯とお味噌汁のお代わりは店内で食べないとできません。



（肥後橋本店）



（淀屋橋 odona 店）

□12月25日（日）～１月５日（木）は対面サービスはお休みです。

当館の冬期休暇に伴い、12月25日（日）から1月5日（木）まで対面リーディングサービスもお休みとなります。

上記以外は通常通りとなりますが、年末年始はいろいろな行事や旅行、ご家族の帰省などでボランティア活動ができないというご連絡を多く頂いています。

この時期、いつも以上に職員からの依頼の連絡が入るかと思いますが、もしご都合が合う日がありましたら月に２回、３回と活動して頂けると助かります。

ご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

□12月、1月のオープンデーについて

毎月1回、第2土曜日に開催している「オープンデー」は、どなたでもご参加いただける館内見学会です。時間は13時30分から約２時間、費用は無料です。参加ご希望の方は対面担当までご予約をお願いします。

12月は第２土曜日の10日、年明けの１月は14日に開催します。

「対面リーディングの集い」に参加して

情報文化センター対面リーディング担当　山岡幸雄

新しく入られた方も多くご参加いただき、ボランティアを始めたきっかけについて伺うこともできました。たとえば仕事場、家庭とは違う場所でいろいろな人に会ってみたいというお気持ちをもって始められた方、ご自身も目の不自由さ・不便さを経験し、回復したときに、自分も何か役に立てたらと活動を始められた方、ボランティアさんの中でもそれぞれに想いを持って始められたことが伺える、貴重な時間をいただけたと思います。

また続ける中で、視覚障害を持った方へのサポートという一方向の意識から、人と人がお互いに関わり合う、ボランティアする方も教わることがたくさんあるんだという、双方向のやりとりを意識するようになったとのお話も伺うことができました。

我々担当も対面のコーディネートをする中で、改めて、ボランティアさん、ご利用者さん、共に実りの多い時間を過ごしていただけるような、そんな調整ができるようにしていければと感じた次第です。

あっという間に年末。1年を振り返ると何をしていたんだろう？と思ってしまいます。来年こそは「これをやった」と自信を持って言える年にしたいものです。（F）

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6136-7704（対面専用）
06-6441-0039（サービス部）